

はじめに

動物園で、おばあちゃんに赤い風船を買ってもらった。うれしくてうれしくて、しっかり握りしめていたはずなのに、いつの間にやら手からスルリと抜けてった。屋根より高く、木よりも高く、雲の上までふわりふわり。私、悲しくてずいぶん泣いて、おばあちゃんを困らせた。私がうんと小さな頃、遠い記憶。

あの風船は、どんな気持ちで空に昇っていったんだろう。動物達や、屋根や、木や、地上のいろんな物を下にして、一人ぼっちの遠い道程。象やキリンやライオン……動物達は悲しそうに見送っていた。彼らもきっと空へ昇って行きたかったんだ。彼らは空の広さの中に故郷の草原を見ていたんだろう。広々とした空の中で思いっきり飛びはねてみたかったんだ。彼らは私なんかよりもっともっと深い悲しみを背負っていただろうに。泣きわめく事もできず唯それを見送っていた。

動物達は私を嫌っていた。彼らを見つめる人間達を嫌っていた。赤い風船は私の子分だったから、彼らにとってそんなもの目じゃなかったはず。けれども、私の手から離れた途端に、それは彼らの仲間になった。赤い風船は彼らの英雄となった。彼らがずっと望んでいた事を、実行に移した最初の……「英雄」。彼らは、風船をじっと見つめていた。空に昇って、雲の中に消えてしまっても、淋しげなうらやむ様な、絶望しきった瞳で、何度も何度も空を見上げていた。彼らは気づいていたのだろうか。自分達には、それが成し得ぬ夢である事を。自分達は一生このオリの中で生きていかねばならぬ運命にある事を。

赤い風船は空に昇ってから、一体どうなったろう。もしかすると、星の仲間に入れてもらっているのかも知れない。

夜になって、動物園が閉園になり子供の声絶えてからも、動物達が悲しそうに空を見上げている姿が時々見えるという。彼らの目に、彼ら自身の赤い風船は映っているのだろうか――。

動物達が空に故郷を見るならば、今、人はいったい何処に故郷を見ているのだろうか。

目 次

特集Ⅰ 四コースがもの申す ——コースを考える——

情報行動科学コース	2
社会文化コース	5
環境科学コース	7
地域文化コース	9

自由投稿 MY FIRST INDIA	松浦 泉	13
---------------------------	------	----

特集Ⅱ 俺達活躍中! ——団体紹介——

1, 2年の部	16
3, 4年の部	18

自由投稿 「夜ふけて思うこと」——医療に関する若干の考察	大西 正己	22
------------------------------------	-------	----

昭和53年度春季学部長杯ソフトボール大会報告	24
------------------------------	----

学部の記録	24
-------------	----

編集後記	27
------------	----



石像「オタリスク」

特集 I 四コースがもの申す

—コースを考える—

新入生の皆さん、大学生活はどうですか？もう学生生活にも慣れて、そろそろ自分が大学で何をするのか考え始められる頃だと思います。その中でも、特に総科で一体何を学ぶのかについて、悩んで居られる方も多くと思います。総科は入学してから一年間、自分のコースを決定する猶予があります。それが良いところでもあるのですが、あれやこれやと考えている内に、自分でも何が自分にあっているのか、分からなくなることもあるんじゃないでしょうか。それは我々二年生にとっても同じことです。しかし、いつまでも迷っている訳にはいきません。そこで今回は新入生の皆さんがコース決定をする際に少しでも資料となる様に、また二年生にとっては自分の所属するコースを十分に認識してもらうために、各コースごとに先生方、三・四年生と院生の方に集まっていただき、各コースの紹介とその現状について話し合っていました。

今回のコース紹介は、今までになされて来たような紹介の方向と異なり、今実際に各コースで奮闘されている三・四年生の先輩からも現状について生の声を聞かせていただきました。この特集を通じて、少しでもコースに対する理解を深めてもらえれば……と思っています。

情報行動科学コース

—重中先生を囲んで—

5月23日、生物教室に於て、コース講座委員の重中先生を囲んで、院生1名、4年生1名、3年生11名、2年生6名、1年生8名の有志が集まり、懇談会が開かれた。

現在の情報行動科学コースのかかえている問題点、学生の研究の方向についての悩み、これから解決していくべき問題点は……（司会）

○情報行動科学という学問はどういう学問ですかと
きかれたら、何とも言うすべがない。心理と生物と数学をごっちゃませにしてどういう学問ができるか、何もできないんじゃないか。

一つの学問領域として、境界領域学際領域の研究としての一つの方向づけとしてはありうるかもしれないが、学部の学生の教育の場として、心理と生物と数学とを一体化した、情報行動科学コースにどんなメリットがあるかについてはわからない。

「学際的な研究はできるが、学際的な教育は不可能である」といわれる先生もいる。

学部の学生として勉強する際に、いろいろな学問ができて、総合的に理解できるんだという幻想を抱くのだったら後で必ずがっかりするだろうと思う。だから、このコースで勉強していく人間として、もともと無理のあるコースなんだという事を考えて、自分のやりたい方向というのを一つにしぼるべきだ。（院生）

○教官側の問題として、まず出身、研究の専門分野

が違うということがあって、ある程度理解、協力はできても、方向転換してまで新しい研究分野を切り開いていくところまではゆけないということがある。たとえば、細胞レベルから個体の行動を理解するにも、またその逆にしても、理解はある程度可能だが、お互いに、専門の研究分野にまで頭を突っ込んで議論できるところまではいけない。協力といっても、個体の行動を数理的に処理することはできても、それ以上のところまではできない。群を通して、セミナーをやろうという提案はなされているが、これもなかなか実現されない。

異なった分野を統合しようという試みを教育面に反映させようとしたものが総合科目であるが、現状では、講義は読み切り講談的で、学生は頭の切り換えをそのつどやらなくてはならず、最後に総合ディスカッションによってまとめることもむずかしい。

学際的な研究はできても、学際的な教育はできないということが含まれているが、学生には、頭の柔らかいうちならできると確信しているし、総合的見地から考えていってほしいと思う。卒論の際でも、

たとえば、心理系をやってコンピュータ処理をやるうとか、生物化学系の手法をとり入れるとか、いろいろな先生についてやれると思う。教官同志の結びつきはないけれど、学生の自由な出入りによってそれを打開していくというのが学生の課題である。みんなで議論して、要求を先生にぶつけてほしい。そうすると、我々も頭を柔らかくして、要求に答えてゆけるようにしたいと思う。最後にその窓口がどこにあるかということを知っておいてほしい。それはコース委員で、今年度は、水上先生と私です。要求にそえるよう、私達、努力します。(重中先生)

今度の情報行動科学コースの志望者を全員受け入れるだけの余裕があるのかどうか。(1年)

○毎年コース決定の際、一番問題になるのが、情報行動科学コースの定員——受け入れ可能数といった方が正しいかもしれないが——で、それをオーバーするのは情報だけで、他のコースは問題ない。去年の志望者は36名で、6名切って30名にしたが、今年の2年は32名の志望数のまま。2名位のオーバーは何とか認めて第1志望に行かせたいという考えで、最終決定の委員会であるコース講座委員会(注:各コースの委員2名ずつによる委員会)に強力に提案して、32名受け入れることになった。ところが、今年の1年生は、情報行動へ行きたいというのが40名近くいるという噂。もし、今年の終わりの段階で、40名の希望者があるとすれば、やはり、30名が上限なので10名のオーバーは問題である。ではどうするかということを経験の先生方の総会で話し合ったところ、やはり何とか受け入れ上限数をひき上げようという事に決まった。これはあくまで総会で決めた事で、最終的にはコース講座委員会で決定しなければならないから、確定したとはいえない。しかし、学生皆の第1志望を通すのが当然なので、そういう方向で頑張ります。(重中先生)

情報行動科学コースの院の状態は?(3年)

○情報行動科学コースは、情報行動基礎講座と人間行動研究講座の二講座制だが、それはあくまで研究組織で、教育組織は三つ、数理情報・生体情報・人間行動に分かれている。三つの群に分けているのは便宜上のことだから、群をまたがっての研究・教育もできる。たとえば、心理系の仕事をしながら、あるいは生理情報の仕事をしながらコンピュータ関係の仕事もできる。

情動行動科学コースというのは、総合科学部をしょって立つような、柱になるようなコースで、本当の総合科学は情報行動だと思う。そういう意味でやりがいのあるところである。

院は今年からスタートしていて、地域研究科と環境科学研究科の二つの研究科ができた。環境科学研究科というのは、環境科学と情報行動科学の先生方が一緒につくったものである。学生定員数は30名で、応募したのは29名、実際に入ったのは21名であった。試験は、外国語が1科目、専門1分野、一般理科2科目選択。但し、行動科学へ進む人の中には社会系の人もいるから、そのうちの1つは社会学か何かで置き換えることもできる。

院の中のシステムは3つの系——環境動態保全系・環境計測系・環境情報改善計画系——に分かれていて、情報・環境の先生方はそのどれかに属している。心理系の先生では共通講座の方へ入っている方もいる。院に入れば、そのうちのどれかについて、修士論文を書くことになる。但し、人間行動研究から純粹の心理学をやりたくて院に進むなら、他の院に行った方がいいかもしれない。

今年度から要望・専門基礎科目の制限がゆるくなったのはなぜですか。(2年)

○大学へ文科系から入った学生も情報行動コースへ自由に入ってもらおうというシステムを作るべきだという、特に3群の先生方の要望があり、つまり、情報行動に学生が殺到してほしいということが第一番めにあった。(重中先生)

他コースでは、53年度の履習細目を適用できるのに、情報行動でできないわけは?

○一番大きな理由は、今の3年生がコース決定の際に、要望・専門基礎科目の履習状況によって、定員30名を越えた6名を切ったため、今度適用することになると、きられた人の方が問題となるから。(重中先生)

52生の場合は、どういう理由からでしょう。(2年)

○力学、熱学が問題となるだろうが、情報行動コースに来る限りは、力学・熱学はちゃんとやっておいてほしい。だから、適用すまいということになった。文科系で入った学生でも情報行動コースは自然系だから、来るからには自然科学の発想の基本となる力学・熱学はやってもらおうということになった。但し、53年度の学生便覧で新しい科目も増えたから、行動科学については、選択必修の欄は53年度を適用することができるこ

とに決定している。その他の群については、(旧)——とあるものだけは選択必修として適用することができ、その他は自由選択となるわけです。

(重中先生)

総合科学の授業科目の中で何が専門で、何が一般教養科目なのかははっきりしないのではないか。(3年)

- 自分は何が一般で何が専門かわからない。だから、「総合科学部とはどんな科目ですか。」と聞かれると、「大学の普通科ですよ」(おくれて笑い)と答えている。時間割表の緑字の授業は一般でも良い、専門でもよいということになっていて、教養的な知識のみ種々雑多にかじって卒業してしまうのではないかと思う。(3年)
- 総科はカリキュラムをみても、専門家を養成する感じじゃない。また、総合科学部にとっての専門科目が他学部の人にとっては一般教養科目ということもあって、何か劣っているような気分にもなる。これでは、教養部と変わらないのではないか。(3年)
- 緑色にすると、初めての人に程度を合わせるとか、人数が多いため一方的な講義形式になってしまうとかで、一般に授業内容の程度が低くなるということもあるのではないか。(3年)
- カリキュラム上の問題もあるが、実際はどうなっているかと言えば、学生と先生の人数のバランスがとれていなく、たとえば、学生数が多過ぎる場合は、いくら学生にやる気があればできるといっても実際の教育では不可能な事が多い。やはり、条件に左右されるものである。個人の問題でもあるが、その条件・環境を整えていくことが大事である。また、総合科学部の校舎で全体の教養を受けもっているということで専門に入った気がしないということもある。(3年)
- 専門でありながら一般への振替えができるのを、われわれは俗に「玉虫」と呼んでいるが、これは見方によっていろいろな色になるという意味で、ただ単位の決め方だけの話であるということです。内容は先生によって違うから、うんと突っ込んだものもあれば、指摘どおりのもある。人が多くてちっとも授業を受けているような気にならないということが問題なのではないか。聴講人数が多いというのは、学生は受けるからには単位がほしい。本当の専門はむずかしいから単位のとりやすそうな科目を、ということもあるといえる。だから、専門を受ける気なら、本当の専門を受けてほしい。

もう一つ、学生の態度ばかりに責任を押しつけるのはけしからんと言われるかもしれないが、みなさんの本当の気持ちしだいで意欲に燃えた学生は、実力が絶対に他学部に劣ることなく、身につくと言えます。(重中先生)

総科に入って失望したという声を聞く、先輩はどう思うか。

- 自分の気もちの持ち方しだいでどうにでもなる。住めば都という諺があるように。(笑い)というのは、自分のやりたいことを見つけ出せば、結構、充実してやってゆけるということで、それができなければ、ゼミや開講してほしい講義など先生にお願いするなどすれば補なっていけるんじゃないんですか。やはり、自分のやりたい事を見つけることにかかってくると思いますね。(4年)
- 不満はありますが、やはり、自分自身がそこでやるしかないという気はします。情報行動という枠組みができたからといって、すぐ新しい創造的なものができるわけないし、それ程厳しい状況に置かれているから、ある意味ではよその学部よりずっと勉強しなければならない。かと言って、自分がやっているとは言いませんが(爆笑)。ただ心理系の部屋が足りないという条件の整わない面があるのですが、不満を言ったらきりがなく、やはり自分自身がやることだと思いますね。(3年)
- 入ってから失望するというのは、実際期待していた考えと、入ってからの考えに食い違いが起こって認知的不協和が起こるわけだ。(おかれて笑い)入る前にテーマを持ったものならば問題はないが、総合科学部に来るってというのは、だいたい何をやるかわからない気もちで入ってくるのが多い。だから、何をやっていいのかわからないまま、模索で四年間終わってしまう場合があるかもしれない。一年間、自分でテーマを決めること、何でもいからぶつかってみるのがいいと思う。(3年)
- コースを決めるまでに失望する時や、認識を新たにしたりする機会があると思いますが、以前に持っていた総合科学に対するイメージと自分が突き当たった壁とを、どう調和させるか、という所で新しく入ってきた人たちは悩むと思います。その時、自分はこう思っていたが、現実はどうであった、だから自分の考えを変えようというのではなくて、自分がこうであったらいいんじゃないかと思う方向に学部を動かしてほしいと思います。たとえば、コースの定員にしても、足切りをされ